

<課題研究論文>

《新学習指導要領への対応—学校教育における実践的課題—》

大学の教職課程における新学習指導要領への対応

—学ぶ対象と学ぶ主体の2面を同時に開く「道德教育の理論と実践」の指導方法—

常磐大学非常勤講師

瀬尾京子

概要

本研究は、教員免許状取得希望者を対象にした道德教育の授業の実践的研究である。新学習指導要領のもとでの小中学校の道德の時間の指導方法とその指導者の人間的成長の2面を同時に開くことをねらいとしたものである。主に授業の終末段階での学生の振り返りの記述から教職課程での道德教育の指導方法を考察した。

キーワード：日常生活、話し合い、異なる考え、振り返り

I はじめに

新学習指導要領の「道德」には、旧学習指導要領から引き継がれていることと新規に追加されたことがある。例えば、「指導内容が日常に生きる」は、旧学習指導要領から引き継がれているのであるが、新学習指導要領では、「学校における道德教育の目標は、道德性の育成であるが、生徒の内面に培われた道德性は日常生活において道德的実践として具現化することが求められる。」¹⁾と児童生徒の現在の生活実態から重点的な指導を要請している。

また、「3 道德の時間における指導内容」で授業の展開について、(4)「自分の考えを基に、書いたり討論したりするなどの表現する機会を充実し、自分とは異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感できるよう工夫すること。」²⁾が、新規内容として追加されている。

この2点に注目して、教員志望の学生を対象とした「道德教育の理論と実践」の指導方法を探ろうとした。

II 研究計画

1 研究のねらい

「育てたように子は育つ」³⁾という言葉があるが、教職に就いたばかりの教師も、かつて自分が教えを受けた先生の指導法を真似ている場合が多い。したがって、学習指導要領が改定されても、多くの若い教師は自分が受けた道德の時間の指導の印象を実践する傾向にある。また、校内研修等で道德の時間の指導を相互に学び合ったり、研修したりする機会などが少ないと、学習指導要領が何回変わろうとも、その改定の主旨は教室の子どもたちには届きにくくなってしまう。さらに、子どもたちの実態と指導の方法がかみ合わなくなり、道德の時間の存在理由が薄くなってしまふことを危惧する。

そこで、教職課程の「道德教育の理論と実践」を受講する学生が、15週の授業を通して次のことを体験

的に理解し、道徳教育への理解を深めると同時に道徳的価値に基づいた人間として主体的に生きようとする態度を身に付けられる授業方法が必要になる。つまり、

本研究のねらいは、学ぶ対象と学ぶ主体の2面を同時に開く授業展開を学生に体験させることにあり、次の2点を意識した授業の展開を図る。

- ① 授業は、異なる考え方・見方の児童生徒と教師が、1つの問題を共有する場であることを体験的に理解していく。
- ② 学生それぞれが協働し、より善く生きる道徳の指導を探求すると同時に学生自身の日々の生き方を振り返り、さらに意欲的な生活を心掛けるようになる。

2 研究の内容

① 方法

ア 履修対象学生（主に2学年）に「ものの見方・考え方」は自分と同じではない人がいること、その人たちの関係の中でより善く学ぶ（生活していく）には、話し合うことが重要であることを学び合いを通して、繰り返し体験させる。

イ 指導案作成・発表・評価コメント交換の活動を通して、さらに、道徳の時間の指導に対する認識を広げ・深め、人間関係のかかわりの仕方等を学生自身のものにしていけるような場の構成を工夫する。

ウ 上記ア、イの学び合い活動等についての学生の振り返りから授業方法を考察し、道徳の時間の指導方法と学生自身の日々の生き方への2面を開く効果的な授業方法を工夫していく。

② 期間 2年間

第1期 2009年度春 semesterの実践による学生の変容を分析・考察し、授業計画・方法を修正し、秋 semesterで実践する。その実践から、見えてきたことをもとに、さらに2面を開く効果的な指導方法を工夫する。

第2期 2009年度秋 semester後に修正した授業計画・指導方法で2010年度春 semesterの授業を実践し、学生の変容分析・考察からさらに授業計画・指導法等を修正し、秋 semesterで実践する。

③ 予想される問題点とその対応

同じ2年生であっても、春に2年生に進級したばかりの学生と秋に受講する学生とは、学びの質なども単純には比較できないと考えられる。計画段階では、教職についての意欲と学生自身の生き方についての認識の違いとして対応する。

④ 期待される成果

学生が学び合いのよさ、楽しさを繰り返し体験することを通して、道徳教育の重要さとその指導方法の工夫を知り、人間関係の対応にも自分を開き、周りの人とより善く生きていこうとする意欲のある教員をめざせる「道徳教育の理論と実践」の指導法の1つを提案できる。

Ⅲ 研究の実際

1 シラバス

学生の実態に応じて授業計画を変更することを含んで下記のシラバスを提示した。

① 科目名 道徳教育の理論と研究

② 対象 小中学校教員免許状取得希望者 2学年

③ 授業のテーマ：目的・概要

テーマ：ともに学び合う道徳教育

目的・概要：道徳性の涵養については家庭・地域の果たす役割が大きいことを前提にしつつ、社会の変化等により、学校における道徳教育の充実に大きな期待が寄せられている。学校教育では、教育活動全体を通して道徳性を養うことが基本である。さらに、教育活動全体における道徳教育を補充、深化、統合するために、「道徳の時間」を設定し、道徳的実践力を育成することが求められている。そこで本授業では、より効果的な「道徳の時間」の指導について具体的に研究する。また、道徳教育の本質を押さえた上で、各教科、特別活動、総合的な学習の時間における道徳教育についても取り上げる。

科目で養成される能力

今日における道徳教育の難しさの背景にはさまざまな要因がある。そこで、本授業では、「道徳の時間」の指導等について、自分の問題として調べ、考え、話し合い、まとめる活動を通して、これらの能力を養う。また、ともに学び合うことによって、協働力、分析力、創造力が養われ、道徳性も高まる。

④ 授業の計画

第1回 自分の経験した道徳教育・道徳の授業、望む道徳の授業について

第2回 道徳教育の基本的な在り方

第3回 道徳の目標

第4回 道徳の内容

第5回 道徳の指導計画

第6回 道徳の時間の指導

第7回 教育活動全体を通じて行う指導

第8回 家庭や地域社会との連携

第9回 生徒理解に基づく道徳教育の評価

第10回 学習指導案作成1

第11回 学習指導案作成2

第12回 学習指導案発表と相互検討

第13回 学習指導案発表と相互検討

第14回 学習指導案発表と相互検討

第15回 テスト

⑤ 指導方法（授業形態と方法）

教科書を使用し、疑問等を話し合い、道徳の指導について自分なりの考えと覚悟を持てるようにする。

⑥ 成績の評価方法・基準

出席状況、毎時間の振り返り、ともに学び合う協働的な態度、テストの結果を総合して評価する。

⑦ 担当者からの一言・受講上の注意

人間としての在り方生き方について自分自身の問題としてとらえて、ともに成長していきましょう。

⑧ 教科書

文部科学省『小学校学習指導要領解説 一 道徳編一』平成 20 年 8 月 東洋館出版社

文部科学省『中学校学習指導要領解説 一 道徳編一』平成 20 年 9 月 日本文教出版

※小免取得希望者は、小学校のみでよい。

2 授業の実際と分析・考察

(1) 第 1 回 (09.4.9) の授業について

① 授業の展開概略

ア 「道徳教育の理論と実践」の概要ガイダンス

イ 学生の受けた道徳の時間についての実態調査と自己紹介

個人研究の時間 (7 分) として「覚えている道徳の授業と教育実習でしてみたい道徳の授業」の記述をさせる。記述後に自己紹介を兼ねて発表することを知らせておく。

ウ 自己紹介を兼ねた記述内容を教壇の上で全員発表させる。(1 人 1 分)。

「書いたものを読むのではなく、先生になったつもりで、話すように。」と指示する。

発表が終わった時点で論者が黙って拍手をすると、学生も自然に拍手した。発表者は、慌てた様子で拍手に対して「ありがとうございました。」と礼を言う。次の学生も礼を言って教壇を降りるようになり、緊張しながらも、気持ちよく学び合おうとしている。学生全員の発表終了後、発表態度・話を聞く姿勢について、「共に学び合おうとする意欲が伝わってきて、うれしい。これからは楽しみです」と伝える。

エ 本時の学びの振り返りを記述 (5 分)・提出

② 第 1 回の授業の分析・考察

ア 覚えている学習方法

覚えている学習方法としては、次の内容と人数になった。(調査対象 37 人)

副読本等を読み、先生の質問に答える・・・	16 人
話し合い・ディベート・・・	12 人
先生などの話が中心・・・	3 人
ビデオ等を見ていた・・・	3 人
老人ホーム訪問をした・・・	1 人
その他・・・	2 人

イ 指導してみたい道徳の授業 (調査対象 37 人)

指導したい道徳の授業については、質問が曖昧であったので、回答は指導内容と指導方法の二通りに別れた。ここでは、指導方法にのみに注目する。

話し合いをさせたいとする学生は 12 人であるが、その内訳は「覚えている道徳の授業」で、「話し合い・ディベート」と記述した 11 人で、他の 1 人は、「まだよくわからない。受講していく中でみつけない」と記述している。加わった 1 人は、覚えている授業の学習方法は、「副読本を読み、先生の質問に答える」

授業であった。

また、「覚えている道徳の授業」で、最も多かった「副読本を読み、先生の質問に答える授業」の16人のうち15人は、「子どもに伝えたい内容」を記述していた。他の1人は、「話し合う授業をしてみたい」と記述していた。教師もやはり、「教わったように教える」傾向にあることが伺われる。

ウ 本時の学び合いについての振り返り（気付いたこと・学んだこと・考えたことなど）

・「道徳教育の意義について」の記述の一部は、下記のようなものであった。

- ・道徳が生活する上で大切なことを改めて実感できる授業にもなると思った。ただの知識だけではない大切な授業だと思った。
- ・「さわやか3組」は、日常的に見ていたのですが、それが道徳に関わっていたと思うと、道徳は日常的に学ぶことができるものだと思感した。
- ・道徳の題材は、基本的には同じような内容が多いと思った。やはり、生きていく上で大切なことは共通しているからだと思う。内容は同じようでも、教師によって捉え方が異なるので、授業が異なる。教師の個性や生き方が反映する授業だと思った。

・「指導方法について」の記述の一部は、下記のようなものであった。

- ・やはり道徳では、児童自身に考えさせ討論させるべきだという気がした。印象に残っていても身に付いているものもあるだろうが、印象に残って今でも気にしている人がいることに、道徳の授業の重要性に気付かされた。
- ・みんなさまざまな意見を持っていて、小中学校の道徳の授業の印象が全く違うことが分かった。しかし、そのさまざまな印象をもつことが当然であり、さまざまな考え方があるからこそみんな話し合うことができると思う。
- ・道徳の授業で大切なのは、「命」。そして、それをいかに使うか、すなわち、「生き方」を生徒に考えてもらい、それを話し合い、他者と価値観を共有してもらうことだと思った。
- ・小学校と比べると、今は、自分の考えを述べたり、話し合ったりする機会が、あまりにも少なくなっているので、この授業では、自分の考えもどんどん出して、他の人の意見を吸収していければいいと思います。（覚えている「道徳の授業」で「特にない」と記述した学生の記述*論者註）
- ・「いじめ」や「差別」など、自分もそのような授業を受けたことを思い出した。その印象が残っている人が多くいるのに驚いた。題材に対して自分の意見を述べたり、他の意見を聞いたり、自分だったら…と、自分に置き換えたりすることで、人ごとでなくなって、真剣に考えたことを思い出した。（覚えている「道徳の授業」で「特にない」と記述した学生の記述*論者註）

エ 考察・授業の計画修正

学生は、忘れかけていた小中学校の「道徳の授業」などで、盛り上がった授業や夢中になった授業を思い出した。それは「話し合う」活動が含まれていた授業である。相手の顔や様子を見ながら、共通のテーマで話し合いたいと思っているようでもある。

自分から話すことに苦手意識をもっている学生が7割もいる状況で、話し合い活動の方法を楽しく身

に付けさせるためにグループ・エンカウターの方法を取り入れて、学生と共に学んでいこうと考えた。

そこで、シラバスの授業計画に第2回から話し合い活動を加えることにした。原則として毎回、異なったメンバーで話し合い活動を行い、多様な視点・考え方があることを体験させることにした。話し合いの題材は日常生活にかかわる新聞の投書欄などの記事を使用することにした。

なぜなら、「道德教育で学んだことを日常生活に生かす」ためには、日常生活での自分の行動を振り返り、見直すことが道德的実践に結びつけ易いと考えからである。

(2) 第7回 (09.5.28) の授業

① 授業の展開概略

前回の第6回(指導案作成について学び合った)の振り返りから「指導案作成に向けての決意、多くの学生が共感・納得するであろう振り返り、指導案作成のヒントとなる考え」を読み上げ、記述しなかった自分の思いに気付いたり、指導案作成への意欲を高めようとした。

② 日常生活での気づきを促すための展開

- ・個人研究の時間(3分)は、新聞の投稿欄にあった大学生(19歳)の「すみません」より「ありがとう」の文章を読み、自分の考えを記述する。
- ・5人のグループづくりをミニエクササイズで行う。各グループごとに、あいさつ、自己紹介をしてから司会者、シェアリングでの報告者を決める。そして、自分の感想・考えを報告し、話し合う。(10分)
- ・報告者が全員の前でグループの話し合いの様子を話す。他のグループの意見や考えを知る。
- ・本時の学びの振り返りを記述(5分)し提出する。

③ 学生Aの学びの深まりから道德的実践意欲へ(学生Aの振り返り用紙の記録から)

学生Aは個人研究からグループでの学び合いを経て、他のグループ発表から気づきを広げ道德的実践へ自分を励ましている。その経過は下記の記述から窺われる。

・個人研究での記述

この記事を読んで、とても共感しました。

実際、私も以前同じようなことを電車内で経験しました。それからは、自分も、人に親切にされたら、「すみません」より、「ありがとう」と言えるように気をつけています。

「ありがとう」と言われた方が、気持ちがいいし、言う方も気持ちがいいということを学びました。

・グループ活動でのメンバーの意見メモ

- ・「すみません」の中にある「ありがとう」の意味
- ・「すみません」と言われると、言われた側は、気が引けてしまう。
- ・謝る時に使う言葉を感謝するときに使うのはおかしい。
- ・「ありがとう」という言葉は、世界で一番キレイなことば。

・ 5つのグループの発表メモ

- 1班・・・場面に合っているのは、「すみません」より「ありがとう」
2班・・・照れくさいけど、素直に言えるようにしたい。
3班・・・「すみません」がクセになってしまっている。「ごめんね、ありがとう」
4班・・・言われた側も言った側も、心があたたかくなる。
5班・・・「ありがとう」は気分が晴れる。場合によっては、手間をかけた、という想いから「すみません」を付けた方がいい時もある。

・ 本時の学び合いの振り返り

話し合い、発表を通して様々な考え方、意見を知ることができました。視野が広がった気がします。「ありがとう」という言葉には、人の心を温かくする力があると思います。これからも、人に親切にされた時など、感謝の気持ちを伝えたい時は、恥ずかしがらずに、「ありがとう」と言いたいです。

④ 他の学生の振り返りと考察

- ・ 学生は、「人によって感じ方が違う」ということを知ることが、人間関係を円滑にする上でも大切なこと、気持ちの良い日常生活を送る上で大切なこと、と再確認している。
- ・ 教師になったときは、何気ない事柄を取り上げ、日常の生活を振り返ることができるような指導をしたい、と日常生活への道徳的実践を意識している。

- ・「ありがとう」という言葉はやはりステキな言葉だと思いました。日常的な事例ですが、人によって、やはり、感じ方が違うと実感しました。すなわち「ありがとう」と言える人になりたいです。指導案に使う資料もなにげない事柄を取り上げて、自分の日常を振り返ることができるような指導をしたいと思いました。
- ・「すみません。ありがとう」と一緒につけるのも1つの案だと思います。意見交換は、とてもいい行為だと思うので、これからも続けていきたいです。相手の立場に立って話す・言うことが大切だと思いました。「ありがとう」その言葉は、とても美しい言葉です。なので、これから先も「ありがとう」と無意識に使える人になりたいと思いました。素直な心を持つことが、言葉につながると実感しました。
- ・ こういう場があると、自分がどういうことに影響されて道徳を身につけたのか考えられて、もし、自分が児童に教える時、すぐに体験が思い出されていいと思った。それに様々な人の意見を聞くことで自分の考えを深められた気がする。「ありがとう」が大切だ。単純なことだけど身に付いていない人も多い。とても勉強になった。

(2) 第10回(09.6.18)～第13回(09.7.9)の授業 道徳の学習指導案の発表と評価

① 授業の展開概略

- ・OHCでの指導案発表(5分)
- ・指導案発表後、聞いていた学生は、のり付きメモ(7.5×7.5cm)に自分の氏名と「よかった点、工夫した方がよいと思える点」を記述して、発表した指導案の裏に貼っていく。その間に次の発表者は準備する。
- ・発表した指導案(裏に評価のメモを貼る)は、次回に提出。
- ・教育実習のときなどに参考にできるように発表した指導案を印刷し、全員に配る。(指導案作成者の許可を得られたもの)
- ・本時の振り返り記述・提出。

② 本時の振り返りから

- ・今回は「あいさつ」をテーマに発表している人が多く、やっぱり「あいさつは」は人が生きる上で大切なんだと思いました。また、サザエさんの家系図を用いて、家族の大切さや家族の役割など、考えさせる点などすごくよかったと思いました。みんな発表がうまくて、指導案もすばらしいと思った。
- ・心理テスト、絵本、群読など、いろいろな資料を使ったり、話し合い方を工夫したり、一人一人の考えた指導案を見られてよかったです。同じテーマでも、考えることは違うので、私もいろいろなテーマで道徳を考えてみたいと思った。
- ・今日もみんなの指導案から自分が授業する時のヒントをえることができました。特に「学級群読」や「終末にレクレーション」など、今まで自分では思いつかなかった方法も知ることができました。参考にしていきたいと思います。

③ 指導案発表・コメントについての学生の感想

- ・指導案作成で私は、今まで受けてきた道徳の仕方をしてしまった。指導案発表の時、さまざまな工夫の授業に驚き、面白そうだった指導案もあった。生きる上で基盤になる道徳は、つまらない授業であってはならないと。子どもたちが興味をもてる授業をつくるのが大切だと痛感した。それには、「道徳の授業」は、こういうものだという考えを捨て、自分自身で考えて作らねばならないと気付いた。
- ・発表をして、たくさんの意見、感想をもらえたことがすごく嬉しくて、自信へとつながりました。また、指摘もいくつかもらったので、今後の参考にしたいと思います。同じ主題の人もいたけど、内容や着目の仕方が違ったりで、すごく参考になりました。みんな、一人一人が個性ある指導案で、聴いていて楽しかったです。
- ・発表をして、みなさんからアドバイスを頂いて、とても勉強になりました。作ったときには気づかなかったことも、アドバイスしてもらって、見直さなければいけないところだと気付きました。他の人の発表を聞くだけでもすごい勉強になりましたが、やっぱり自分で発表をして、それに対して評価をもらうのが一番勉強だと感じました。次は、もう少しいい指導案が作れそうな気がします。

④ 考察

指導展開の方法、工夫した資料の使い方などを学び合っている。また、自分が受けてきた道徳の時間の指導法から脱皮を決意した学生がいる。この自覚・決意は本人もそうであるが、この学生の指導を受けられる児童生徒にとって意味のあるものである。

さらに、指導案についてのコメントは、発表者に人間的温かさと応援として受け取られ、自信とさらなる意欲につながり、評価者の成長にもなっている。

(3) 第15回(09.7.23)の学生の記述

① 道徳の時間の指導法について

40人の学生全員が、この授業で自分が体験した指導方法「自分一人で考え、グループで話し合い、その内容を全員に発表し、改めて自分で考え、終わりに振り返りを書く」という活動は、道徳的实践力を育成できると下記の例のように記述している。

- ・教師は自己の倫理観を押し付けるのではなく、生徒自ら考えさせ、自分で正しいと思う考え方を周囲の生徒などとも協力しあいながら作っていくことが重要である。このように生徒に考えさせるためには、教師の発問もまた、非常に重要であり、よりよい授業を行うための働きかけも、この授業で学んだことである。
- ・道徳の指導方法として、一番大切なことは、生徒の気持ち・意思を認め、それを授業に生かすことだと思う。生徒・クラスに合った教材を選び、授業を展開することは難しいが、それによって生徒同士や先生とのコミュニケーションがとれるはずである。道徳の授業によって、自分と他人との付き合い方を体験的に学ぶことも目的にあると考える。

② 道徳を指導する教師について

- ・道徳を指導していく上で教師の人間性が重要となる。教師の人間性を生徒に押し付けることなく、生徒に提示していくことで、生徒は自分の考えや思いを重ね、対比し、自分の進むべき道を見つけていくのである。また、副読本や資料もそういった意味があったのではないかと考える。道徳の授業で大事なことは、生徒一人一人が自分の心の内面を見つめ直し、周りの物事・自分の経験を通して自分の進むべき道を見出したりして自分自身を成長させたりすることであり、その中で教師の仕事は、きっかけを作ってあげること、そして生徒の背中を軽く押してあげることだと考える。
- ・私は、みんなで学び合うという指導法を取り入れたい。道徳は、他教科以上に教師の人間性や考え方が直に現れる。教師ができていないことは児童生徒は実践してくれない。だから、道徳を教える教師は日々意識して人間性を高めていくことが要求される。

③ 生活の中で学び、生活を心豊かに

- ・教室の中だけでなく生活の中で学べるのが道德であると分かったので、これから毎日を大切にしていって、日々勉強し教員になれたら、児童生徒と共に学び、共に成長していけたらと思う。
- ・すべての生活の基盤になっているのが道德だからこそ、身近なことを取り上げて一人一人のペースで気付いてもらえたらと考えるようになった。

④ この授業で自分が成長したと感じること

- ・多様な見方ができるようになった ・ 22人
- ・学び合いの楽しさを体験できた ・ 18人
- ・人前で話せるようになった。 ・ 7人
- ・力まず自然体で話せるようになった ・ 3人

- ・自分の考え方に「+α」してくれた仲間のお陰で今の自分がいることを改めて思った。そんなふうにも私に他者に対して、どんな小さなことでも影響を与えていたら嬉しいと思った。
- ・ミニバスケットのコーチをしているが、チームプレイの中で道德心を育てよう意識して指導している。子どもは私の行動をしっかりと見ているので、自分の行動に責任を持ち、道德心を育てていけるような大人になりたいと決意した。
- ・自分のことが嫌いでしたが、私を受け止めてくれる人がいるとわかり、少しずつ自分を好きになりつつある。

3 本研究から見えてきたこと

(1) 「道德の指導法」について開く

学生は同じ主題について指導する場合でも、児童生徒の実態のとらえ方、人生観や指導力によって、児童生徒の道德的価値を実践しようとする感動や覚悟が異なることをつかんだようである。

(2) 「自分自身の内面に開く」について

- ・日常生活の「おやっ？」と思うことから、まず、学生が自分自身を振り返り、日常生活に実践しようとする意識・覚悟を促すことができそうである。そして、15週の間で意識しながら行動していれば、なりたい自分の姿・行動に現れるようになる。授業のはじめや終わりのあいさつも、それぞれできるようになってくる。
- ・グループでの話し合いの司会、記録、発表等の役割を分担することで、グループでの人間関係に配慮する力が付いてきた。(毎週メンバーも変わり、特に発表は全員が体験する)
- ・話し合いで自分の意見を言うことに苦手意識を持っていた学生も、自分の考えとAさんとBさんの意見のどこをどう関連付ければよいかを工夫し、問題点を掘り下げたり、広げたりするようになっていった。

以上、2面に開くことをねらいとした上記の「道德の理論と実践」の指導法は、ある程度目的を達したのではないかと推測される。しかし、2面への開き方が、自分自身に開く方に傾いたように反省する。なぜなら、

教職を取らない学生が、「生きること」について、顔を見ながら本音で話し合いたくて、途中から参加しているからである。

研究期間第1期の秋 Semester では、道徳の内容（主として自分自身に関すること、主として他の人との関わりに関すること、主として自然や崇高なものとの関わりに関すること、主として集団や社会とのかかわりに関すること）の4項目からそれぞれ1つずつぐらいは取り扱いたいと考えている。

註

- 4) 話し合いのルールとして、次のような内容を3週にわたって学生に話した。特に対立する考えを言う時は、その相手を心から尊敬していると思うこと。自分の考えを鍛えてもらえる意見に出会ってうれしいという気持ちを笑顔で表す。そして、例えば「Aさんの意見にもうなずけるのですが。」と、ひとまず受け止める。そして、「この部分で私は〇〇と考えるのですが、いかがでしょうか？」というように、意見や考えの部分をつなげて、グループの鎖を作っていくつもりになって話す。

参考文献・資料

- 1) 中学校学習指導要領解説 道徳編 文部科学省 平成20年9月
- 2) 同上
- 3) 「いのちの言葉」相田みつを 卓上カレンダー